
人間という名の記憶

ohmori

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間という名の記憶

【NZコード】

N7329A

【作者名】

ohmori

【あらすじ】

全ての人間を憎む、陣河高校三年A組『響山巧臥』。生徒にはイジメを繰り返し、ついには人を殺した。だが、巧臥は一人の老人との出会いで変わっていく……。

「プロローグ」

俺は全ての人間が憎い。

人間など汚い。

金と欲望に溺れる憐れな独裁者。

俺もその人間の一人だと思うと自分を傷つけたくなる。
殺す。

いつか殺してやる。

「人間という名の記憶」

「ガンつけてんじやねえよ！！」

「ぐあ！」

「ちつ……ムカつくんだよ…………。

人間の分際で俺に近寄るな。

蹴りを入れたところで、俺の心は晴れない。

だが、こうすることによって自分で人間の存在を否定できた。

「響山君！」

「やめなよ！」

「人間如きが俺に指図するんじやねえ！」

「さやあ！！」

ちつ！

女には手を出さないとでも思つたのかよ。
蹴りぐらい何発でも入れてやるぜ。

「響山あ！」

いい加減にしないと親に言いつけるぞ！」

あん？

親？

あんな奴ら、親でも何でもねえよ。
今すぐにでもぶっ殺してやりてえが、刑務所に捕まっちゃったら
俺の目標が果たせねえ。
核でも爆弾でもいい。
人間共を殺す。

「響山！」

聞いてるのか！？」

「黙れ、糞野郎。

先生だ？

ふかしこきやがつて」

「貴様……！」

「手……出せるのかよ？
てめえ、退職処分だぜ？」

「くつ……！」

そうだよな。

人間は所詮自分が可愛いもんだ。
自分さえ良ければいい。

周りの奴などお構いなし。

偽善者ぶつた奴らが一番嫌いだ。

人生の先輩だかなんだか知らんが、結局そいつらも汚え人間なんだよ。

「おい、校長殴つてきてやるから、俺に手を出せよ。

そしたら、校長もブチ切れで俺を殴つてもいいくつも言つようにな
るからよ」

「響山！」

待て！！！」

俺が手伝つてやらねえと手も出せねえ臆病もんが。
人を傷つける喜びを教えてやるよ。

「なんだね君は…………？！」

校長室つてやつは、いつも生徒を怖がらせる。
だがよ、ここで本当の恐怖を奴らに教えてやるよ…………。

「よお…………。

ただ殴るだけにしようと思つたけどよ。

やっぱお前、殺すわ

「なつ！？」

一撃だつた。

眉間に拳を入れただけで死にやがつた。
肥えた豚は、こうなる運命なんだろうがな。

「響山……」

「遅かつたな。

こいつ、死んだぜ」

「貴様、なんといふ」とを……

校長が死んで悲しいか？

そんなわけないよなあ？

ただの、見栄つ張り。

ただの、偽善者の遠吠え。

お前も、死ね。

「ぐああああ……！」

お前には、特別にナイフを使ってやつた。

偽善者ぶつたお前に俺の最後のプレゼントだ。

サスペンスみたいに胸にナイフ刺されて死ぬのが夢だらう？

可笑しいよな。

死にたいなら、さつさと死ねよ。

……他の奴らが騒ぎを聞きつけやがつたか。

「あなた……！」

どういうことか説明しなさい……！

桧垣先生は、警察と救急車を！

「は、はい！」

ちつ、先公共めが。

寄つて集りやがる害虫以下だぜ。
つまらねえんだよ。

お前らも全員死にな。

「ぐつー..」

「ああーー..」

断末魔が、俺の耳を汚す。
血が、俺の服を汚す。
だが、奴らを殺すことによって、汚れる事はもうない。
俺も気が済んだら、そっちに行つてやるからよ。

俺は、なんとなく街に出でていた。
俺は人を殺した。
だが、皆は気付いていない。

ここから、もう世の中の理不尽は始まっている。

「少年」

「……あ?」

「悲しきかな。

お主の目には悲しみの色が浮かんである。
お恼みかな?」

「……消えな。

俺は、人を殺した。

お前も殺すかもしない

「かもしれないとは曖昧じやな。

それは、お主が少しでも迷つてている証拠ではないか？」

「迷うわけねえだろ。

一度人を殺してゐるのに、やり直せるわけないだろ」

「やり直せるとも。

かつては人を殺すことが名誉だつた時代もある。

お主は変われる。

その時代に生きた者達の様に

「説教してんじゃねえよ。

わざと警察に言えばいいじゃねえか」

「今の警察に、同情の余地はない」

「……あ？」

「警察も人間じゃ。

お主はそれを見て落胆するだけ。

よつて、わしがお主を変えてやひひ

「てめえにできるわけねえだろ。

いい加減にしねえと殺す

「変なじじいだ。

ナイフを使つまでもねえ。

「……お主は、校長と、教員を殺した」

「…………」

「お主は、生徒は殺さなんだ。

これがどういう意味か分かるかな?」

「……なんで、知つてんだよ。

てめえ……つけてやがったのか……!?

「…メモリートレース。

他人の記憶を垣間見る事ができる能力。

人を人と思わないお主にはちょうどいい能力じゃろ?」

「……ふざけたこと言つてんじゃねえ」

「もうすでに、その答えは出ているはず。

お主は信じてしまつていてる。

それもそのはず、すでに証拠は出たのじゃからな」

「……その能力が使えるなら、今頃皆が使つてるはずだぜ」

「宝の持腐れ。

皆がそうじや。

自分の能力を開花させる事も無く生涯を終える。

それができるのは、いく一部。

皆が可能性を持つておるといつのこと

「……

「気になるよ、じやな。

皆が皆、どのよつた事を思ひて生活してゐるか……。
お主も垣間見る事ができるじやない。

ついてくるがいい

別に、人間を思い直したわけじゃない。

まだ、人間が憎い。

無論、このじじいも。

だが、興味があった。

俺の柄じやねえが、少しでもこの血塗られた運命を変えられるなら
信じてもいいと思った。

じじいの名は、寺谷弦郷。
柄にも合わねえごつい名前だ。
しかも、家を持つてねえらしい。
俺らは、そこいら辺の川原で日常を過いでしていた。

それと、奴はメモリートレーサーとしての力はまだ誰にも勝つていらし
いらしい。

なんで、俺だけに言つたのか……。
まだ俺には分からなかつた。

「巧臥。

「醤油とつてくれ」

「……寝ぼけてんじやねえよ……」

朝飯食つたばっかりだろ

「はて……そりじゅつたか」

「はあ……。」

まだ寝たいんだつたら寝ろよ……」

「いやこせ、今日の一日頑張る予定じゃぞ」

「はこせこ……」

俺は、じじいにじこかで心を開きかけていた。
まだ、一緒に過ごし始めてから、一週間だつてこいつのこと。
俺、どうかなつちまつてんのかなあ……。

「さて……そろそろ真髓じや」

「なんだよ、こきなりシリアルスになじやがつて……」

「いや、教えてもこい頃かと思つてな。

つーても、お主には微力ながらもその力は芽生えてゐるとは思つ
がな」

「……なんだつて?」

「わしの記憶を読んでみるがいい。

少しほ分かるはずじや。

……全神経を働かせ、相手の目をよく見るのじゅ…………

「…………」

俺は、じじいの言つ通りにした。
すると、だんだん自分の記憶ではない何かが入ってきた。

「なつ…………！」

じじいの若い頃だった…………。

皆に、暴言を吐かれ、罵倒され、地獄の光景に思えた。

『消えろよ！

てめえはいらねえんだよ！…』

『人の記憶を読むなんぞ、とんでもない奴だぜ！』

「ぐああああああああああああああああ…………！」

俺は次の瞬間、気を失った…………。

「…………臥、巧臥！」

「ん…………？」

「少し、ショックが大きかつたようじゅな

「ショック……？」

「記憶を読む場合、自分の記憶を消し、無防備な状態になる。自分の経験した事のない記憶……さらに、それが術者に対して、どれだけショックが大きいにも関わる。

慣れないうちは、仕方がない。

その現象を『メモリー・テストラクション』と言つ

「……それは、さつき思いついだら」

「はい、すいません」

「まあいい……」

つまり、自分の記憶に無いものが飛び込んできたから
そのショックが大きかったって事だろ」

「その通り。

……で、分かつたかな？」

「ああ……バツチリな……」

なあ、これを……俺のクラスの奴に使つてもいいか？」

「ああ、それでお主が何か分かるなら」

「おお……今までありがとうございました。
また、来るぜ」

「巧臥」

「なんだよ？」

「人間は、本当に汚いかね？」

「……」

「お主は変わった。
自分の世界観を持つた。
罪は消えんが、償う事はできる。
お主にできることを考えよ」

「……ああ、じゃあな、寺谷さんよ」

俺は、初めて笑顔を見せたかもしれない。

それは、あのじじいが初めて信頼できる『人間』だったからだろう。

次の日、久しぶりに登校した。
学校は、学級閉鎖になっていた。
だが、俺はお構いなしに門を開けて校舎に入った。

「……誰もいねえよなあ……」

俺は、土足のままで一階の3年A組の教室に行く。

「待つてたよ……響山君」

「お前は……友岡」

俺が、いつもいじめていた奴……友岡。
なんで、俺なんかを……？

「君が、全然学校に来なかつたから。
何かあつたのかと思って」

「…………わからねえ。

お前は俺を恨んでいるはずだろ…………」

「…………僕は知つてる。

いじめている人は確かに弱いよ。

でも、君は何かが違つたんだ。

人を、人として思わないといつていうか…………

同じじやねえか…………。

なんで、なんで俺はいじめてた奴に自分の事がばれちまうんだよ…………。

じじいだつてそうだ…………

あれは、メモリートレースなんかじゃなかつたんだな…………。

「とにかく、君の事が心配だつた。

何をしてたんだい？」

…………悪いな。

少し、記憶見させてもらひうぜ…………。

『邪魔なんだよ。

消えろつってんだろ』

『それは君の本心じゃないはずだ

『偽善者ぶつてんじやねえよ…』

違つ……！

『僕は……！…』

やめろ……！…！

『痛い目見えねえと分からんよつだな！…！…やめろ！…！…』

『ぐつ……！…』

俺は次の瞬間、気を失つた……。

「……………」

見覚えがある……………！」は……………病院だ……………。

「気がついたかい？」

「お前が……………運んだのか？」

「うん、急に倒れたのでびっくりしたよ」

「お前……知ってるんだろ？」

俺が、奴らを殺した事を

「…………そうだよ。」

今は、警察が血眼になつて捜していると呟つ

「…………言つてねえのかよ？」

てめえが言わなくとも、他の奴が黙つちやいねえだり

「僕が、なんとか抑えたよ。」

彼らも、君が何か違う事には薄々気がついたようだった

「…………馬鹿野郎共が…………」

「響山君は、これからどうするの?」

「そうだな……」

これから考える。

てめえには迷惑かけちまつてるし、ソレで腰をつもつはねえが
な

「…………やはり、行つてしまおうんだね」

「………… んだよ。」

俺がいなくなつてしまふのをじやねえのか?」

「そんなわけないじやないか。」

これから、君がどうなつてしまつのか。
心配だよ……」

「なんだよ、てめえまで……。
いい加減、頭きちまうぜ」

「響山君……。

君、変わつたよね?
何があつたの?」

……わすがに、じじいに断つも無しにはダメだよな。

「じゃ、ついてきな。

『そいつ』に許可もいらつからよ

「……?」

あ～あ、俺、いつからこんなお人好しになつちまつたんだか……。

「案外早い帰りじゃつたの」

「つるせえよ。

まあいい。

こいつは友岡虔。

メモリートレースの事教えていいか?

めつ使ひまつてゐるじよ

「……歯とや、少し、わしの近くに来たまえ」

「は、はー」

「……」

メモリー・トレースだな。

多分、奴がそれだけの器かどうか測つてゐるんだが。

「…………よひしー。

お主は一回、相手を『メモリー・テスト・ラクション』に陥れている。
すぐに習得できるじや ろひ

「だからそれ……即席の名前だろ…………。
てか、なんでメモリー・テスト・ラクションを起しあせたらすぐこ習
得できるんだよ?」

「それは、すでに相手の記憶に入ったも同然じやからじや。

人は、必ずしもその能力を持つてある。

それで、無防備になつた相手の記憶にすんなり入れるのじや。
つまり、彼はすでにお主の記憶を垣間見てしまつてこるのでじやよ。
まあ、彼はそんな事は気付いてないじや ろうがな

「メモリー……トレース……？」

「よひしー。

お主にも教えてやるが」

20分くらい経つたろうか。

もう、友岡はメモリートレースを覚えやがった。
俺の立場ねえなあ……。

「それは、相手の心を知る事ができる。
だが、それと同時に諸刃の剣じや。

自分の心に余裕がないと、メモリー「ストラクションはすぐに起
じるじやろ。

『氣をつけるのじや』

「はい、分かりました」

「じじい、俺、行くわ」

「じうあらつもつじや？」

「ううにしても、警察に捕まるだけだ。
じうせなら、全うした生き方をしたいからな」

「逃げているのかね？」

「まあ、そんなところだろ？
でもよ、俺の人生なんだ。

ちょっとくらい逃げてもいいだろ」

「ふつふふ。

「言つよつこなつたの。お
それを分かつておつたら、もつ言つ事はない

「おお、まあ、そのうち帰つてくるかもな」

「響山君。

僕も行くよ

「なーに言つてんだよ。

お前には、家族がいるだろ。
友達もな。

それを捨ててまで行く理由お前に無いだら

「やつじゅとも。

お主は残るべき存在じゅ

「……分かつたよ。
気をつけて」

「おお、野垂れ死ぬ前に帰つてくれるわ」

俺は踵を返す。

後ろで、じじいと友岡の声がする。

俺は振り向かない。

俺は、強くなる。

「行つてしましましたね……」

「……これも宿命か……。」

虔よ。

少し耳を貸せ」

「？」

（エピローグ）

俺は知つた。

人は、俺が思つてゐるほど汚くないと。

俺は知つた。

俺の事を考へてくれる人がいると。

俺は知つた。

友を持つべきだと。

そして、強くあるべきだと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7329a/>

人間という名の記憶

2011年1月26日23時59分発行